



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.32 (2008.9.25)



本学初めての日本語教育専任教員

岩田先生着任メッセージ



語学センターホールにて

市立大学では初となる日本語教育の専任教員、岩田一成先生が、国際学部の講師として今年の4月に着任されました。語学センターのホールには岩田先生自作の日本語ボランティアなどの募集の案内(左写真)が設けられ、語学センターにはすでに新たな風が入ってきています。

また、岩田先生は青年海外協力隊経験者であることから、興味深い話や新しい情報の発信者として

活躍が期待されています。そこで今回は、岩田先生に、市立大学の教員になるまでの経歴から市立大学でのこれからの抱負などを語っていただきました。

目次：

日本語教育専任教員

岩田先生・・・1

ミニコラム：

情報科学研究科 松原先生・・・2

自習室の利用状況・運営・・・2

ヒロシマ人宛書簡2・・・3

ハワイ大学マノア校

交換留学レポート・・・4



中国内モンゴル自治区で協力隊

大学卒業後、すぐに青年海外協力隊に参加しました。中国内モンゴル自治区で日本語教育に関わりました。学生はまじめだし食べ物はおいしいし、楽しい2年半でした。部屋がめちゃくちゃ寒かったり(外気はマイナス30度)、階下がディスコでめちゃくちゃうるさかったり、学期の開始時期が三日前になっても決まらなかったり、カルチャーショックはいろいろありましたが、おおむねおもしろかったですね。海外に出ると自分が持っていた‘常識’に気がつきます。また、その‘常識’が普遍的ではないってことにも気づかされます。それが自分にとってはおもしろい経験でした。帰国後大学院に進み、国際交流基金日本語国際センターを経て、こちらに赴任しました。

必要なのは“伝えたい内容”だ！

国際学部というだけあって、海外に興味がある学生が多いですね。私は学生時代、「海外への扉は英語で開ける」と思っていました。もちろん英語をがんばっている人とコミュニケーションをとるのは楽しいことです。でも、もっと大事なのが‘伝えたい内容’じゃないでしょうか。英語を使って何を伝えたいのか、それを学生時代にもっと考えて欲しいです。また、英語を使わなくても国際交流はできます。そういった選択肢の存在をみなさんにはどんどん紹介していきたいです。

市大生続々進出！日本語ボランティア

日本語ボランティアの募集などが載った掲示板を語学センターホールに作りました。地域社会と市立大学の間の風通しをよくしたいと思っています。青年海外協力隊、広島の地域日本語ボランティアなど、募集情報が満載です。私自身は沼田公民館内で開講している沼田日本語教室にボランティアとして関わっています。毎週土曜日午後1時からです。おもしろいでっせ～(なぜかあきんど風)。みなさんも、どんどん地域に出て行きましょう。掲示板を見て応募してくれた学生が多数いたようで、すでに広島国際センターからお礼メールがきています。

専門はチマチマと文法研究をしています。ほんとうは、みんなが日本語文法のおもしろさに気づいてくれることを期待しているんですがね…。それはまたまた次の目標。



青年海外協力隊時代の授業風景。黒板がレトロ～。(写真右:岩田先生)



砂漠化などの影響で、内蒙古でこのようなゲルはもはや観光地ぐらいにしかありません。

「LとR」



中学校で英語を習い始めた頃、「LとRの発音に注意して」と授業の中で教えられた事がある。そんなものかなと、何となく覚えてはいたけれど、日常的に意識した事はあまりなかった。

10年前、英国のイーストミッドランド地方に1年間滞在する機会があった。小学1年生の娘は現地小学校のYear3に通う事になった。そこには娘の他に日本人の子どもは一人もいない。英国での初等教育の様子に興味があったので、娘が環境に慣れるまでという口実も手伝い、しばらく同行して様子を見ることにした。現地の先生方との話や授業は、大変興味深かった。Year3の授業だからといっても侮れない。Literacyの内容は、日本では高校レベルだった。しばらくすると、隣に座っている少女とうちをけて仲良くなり、何となくコミュニケーションしている。これで一安心だ。同級生は、ローラという名前だった。

ある日、その子が家に遊びに来たので、ローラと声をかけたら、きょろきょろと見回して変な顔をした。もう一度声をかけても同じだ。Lauraには、LとRが入っているではないか。子どもは素直なものである。大人との会話では指摘される事も無いし、何となく会話は成立するので忘れてしまうが、やはり奇妙に感じるのである。重要な事だったのだと、改めて気づかされた瞬間だった。それにしても、娘と話をしているときには、そのような反応は無かったのだが。

語学センター自習室利用状況と運管用HP

語学センター・語学教務員 堀本真由美



授業期間中の自習室は満席！

語学センターの自習室は平成7年度から稼働しているCALL教室です。当時32ブースだった自習室も2度の機器更新を経て現在では80ブースになっていますが、それでも授業期間中は自習型授業の「CALL英語集中」(I・II：全学部1年、III・IV：国際・情報2年必修)の受講者で満席になるため、他の空き教室も開放して対応しています。

語学センター自習室や他で学生が通常行っている自習・その他の利用としては、一般的なインターネット・メール利用を除き、以下のようなものが挙げられます。

- CALL英語集中の受講(Webによる自習型プログラム。スピーキングの場合は発音のために別教室を開放。)
- レポートやプレゼンテーションの作成、教員への提出 (Officeソフトウェアや辞書の利用も。)
- 映像視聴 (映画DVD教材、海外衛星放送、インターネット動画)
- 教材利用 (音声教材をはじめとする外国語学習教材)
- 教員指定の教材の使用 (DVD、教員ホームページ閲覧、プリントアウト、音声教材の受け取り)
- 空き教室での模擬授業練習
- 空き教室でのグループ学習 (映像利用を含む)
- インターネットやメールを利用した、留学の情報収

集・手続き、就職活動など

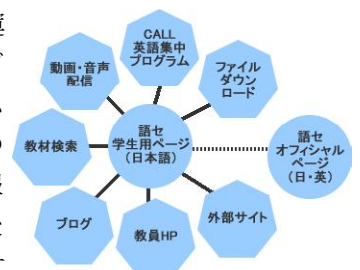
- 大学情報ネットサービスでの授業登録・確認など
- 編集室での音声や映像のダビング・編集作業

休暇期間は自習に来る学生が少なくなりますが、今年の春期休暇から「社会人の学びなおし英語eラーニング講座」が実施され、夏期休暇中の現在も2教室を一般市民の方が同講座で利用されています。

学生HPへの情報提供・リンク依頼、大歓迎！

語学センターは自習室運営のために平成12年度ごろから学生向けのホームページを作成し、学生とのコミュニケーション・情報提供に努めてきました。後になって作成した学外用オ

フィシャルホームページ (日本語約125ページ、英語約15ページ) とは目的が異なり、学生用のホームページ (日本語のみ約50ページ) は学内限定で、語学センター教室や教材、機器の利用方法についての他、英語や第二外国語の学習・検定・留学情報を提供しています。ここ数年は、芸術学部生の展示や外部の国際交流団体の情報など、学生からの情報掲載依頼も増加傾向です。教材検索ができる語学センター教材データベースもあり、一部動画配信も行っています。これからもコンテンツ充実のために、いろいろな試みをしていこうと思います。



ヒロシマ人宛書簡2

生の中の死、または死の中の生としてのヒロシマ（下）

ヒロシマ63年の現代史、被爆“生存”者の平均年齢が75歳という2008年、北京五輪も閉会しG8議長サミットも閉会し、夏期休暇は終わり勉学の秋が来る。Aよ、元気か。意気軒昂ではあってほしい。

先の書簡ではリフトン『死の内の生命』の中味を3項に類別し、①医学上の原爆症の心理的障害(心的外傷)について説明した。時効のないことを知っておきたい。②被爆者と核の問題については、なお知るべき論ず

べき事態がじつに日々、生起している。現代史たるゆえんだ。セミパラチンスク、被曝者、原子力発電、NPT(核拡散防止条約)、核保有国(米・露・中・仏・英とインド・パキスタン・イスラエル・北朝鮮)、米印原子力協力協定。1945年8月には予想できなかった、地球規模の課題の山積にどう対処するか。一方で、静かで健康な生活、シンプルに知的で楽しさ豊富な文化的生活をワタシは望んでもいるが、列挙した現代の反核課題からも逃げられない。歴史に学んで創造的な対応をしなければならない。

「創造的対応」と名づけたリフトン本の第10、11章に入る前に、第7章「解けやらぬ葛藤」にも注目しておきたい。モニュメントとミュージアム、即ち記念建造物についての合意形成への困難な過程を記録している。道路(巾百米の「平和道路」は「ABCCに至る王道」であったか)、資料館(溶けた石の標本を収集するひとりの地質学者のこけの一念から出発する)、ドーム(保存と解体の論争)、記念式典(お祭り? 祈りだけ?)、それぞれがその時折の状況のなかで対立意見を生み、圧力や騒ぎを呼び、ジグザグの進行を経て現にあるスタイルとなっているのである。

「過ちは繰り返させぬから」という原爆慰霊碑(広島平和都市記念碑)碑文をめぐる論議(主語は誰?、誰が過ちを犯した?)はよく知られているが、リフトンはさらに、被爆者が無意識的「罪の意識」ゆえ

に、生き残ったことを「過ち」と自身思い、自分らへの非難が公的に後世にまで残ると考えることに、本当の厄介さがあるという。「自分たちが生き残った『あやまち』こそ、原爆であれほどの死者が出た原因なのだ」という思



巖光《眼のある風景》1938年、東京国立近代美術館蔵

い込み」(238頁)——今から思えば絶句したいほどの、度しがたい認識錯誤。だが当時にはこのような倒錯的な病的心理にこそリアリティがあったわけか(それともリフトンの自説の強調?)。

あらためて碑文に戻れば、すでにもう繰り返し繰り返し過ちを続けている現在ではないかとすら思われる。

③被爆者はどう作品表現されたか、「創造的対応」の章に入る。リフトンによる「原爆芸術」作品評でもある。原著Death in Life刊行の1967年までの作品に限られるのは当然だが、多ジャンルにわたる総合性と先駆性がある(映画についてはM. ブロデリック編著『ヒバクシャ・シネマ——日本映画における広島・長崎と核のイメージ』現代書館、という訳書が99年刊)。といっても詩は峠三吉、米田栄作、音楽は大木正夫、ペンデレッキ、《原爆許すまじ》、美術は丸木位里、赤松俊子《原爆の図》ぐらい。文学は井伏鱒二『黒い雨』を別格に阿川弘之『魔の遺産』、竹西寛子『儀式』、井上光晴『地の群れ』、堀田善衛『審判』、いいだも『アメリカの英雄』、そして大田洋子『屍の街』、梶山季之、小久保均らである。

そして映画。5本挙がる。亀井文夫『世界は恐怖する』、木村莊十二『千羽鶴』、新藤兼人『原爆の子』、黒沢明『生きものの記録』、アラン・レネ『二十四時間の情事(ヒロシマ・モナムール)』。

個々の評価に立ちいれず作品名を挙げるのみなのが残念。核をめぐる「創作的対応」がもっと活発化してよいと思う。

Aよ、君は『ヒロシマ・モナムール』を観たか? 「君はヒロシマを何も知らない、何も」。

(嘸異見致)

ハワイ大学交換留学体験レポート!!!



オアフ島ヨコハマベイビーチにて
写真右:金光さん

現在国際学部4年生の金光祐奈さんは、1年間のハワイ大学マノア校での交換留学を終え、今年6月に帰国しました。金光さんは留学前から語学センターをよく利用しており、ハワイ大学留学が決定してからも、留学準備に励んでいました。その彼女が、ハワイ留学体験を綴った記事をニューズレターのために寄稿してくれましたので、特に留学を考えているの学生のみなさんは、彼女の留学体験を参考してくださいね。

「ハワイ留学体験記」

国際学部4年 金光祐奈

2007年8月から2008年5月まで、ハワイ大学マノア校へ交換留学をしました。今回はその体験を書かせていただこうと思います。

留学準備は、初海外ということでも分からないところからのスタートとなりました。1年生の3月にTOEFLの必要スコアを取得し、2年生の3月に派遣が決定しました。それからハワイ大学と連絡を取りながら、住むところの確保や(くじで大学の寮に入ることができた)、VISAの取得(6月に大阪まで審査に行った)等の準備を進めました。不安も大きかったので、過去に派遣された先輩方にお話を聞くことで現地での生活のイメージを膨らませていきました。一方で、3年生の前期が終わるまでは市立大学での勉強にも力を入れていました。

8月の半ばにハワイに到着。ハワイは大変気候がよく、太陽の光はとても強いのですが湿気がなく、割と涼しいです。日本の夏よりも大分過ごしやすい環境でした。

ハワイ大学では多くの授業が開講されていて目移りします。私は自分の専攻に関連した授業や、興味のある授業を取りました。授業は1学期につき4つしか取りませんが、同じ授業が週に2~3回あるため、予習や復習がとても大変でした。特に予習に関しては毎回大量のReadingをこなさなければ授業についていくことができないので、睡眠時間を削ることもありました。疑問点は先生に質問したり、レコーダーで授業を録音するなどしました。学生は皆勉強

熱心で積極的なので、とても刺激を受けます。どの授業も定期的に小テストや中間試験があるため、常に気が抜けません。初めはとても苦労しましたが、2学期目に入ってから是要領をつかんで、自分のペースで勉強を進めることができました。

大学自体は広く、周りに山があつて緑が多いです。図書館は24時間開放されているので、テスト前などはよく利用しました。食堂もキャンパス内に多くあり、毎日違う食堂で昼食を取ったりしていました。量はやはり多いです。住むところは大学の寮で、4人部屋でした。快適な寮生活でした。

ハワイ大学には世界中から多くの学生が集まっています、色々な人と交流できます。現地の友達ができると、色々な所に連れて行ってしてくれます。休みの日には海に泳ぎに行ったり(ハワイには美しい海や自然が沢山あります)、ご飯を食べに行ったりして遊びました。長期の休み(冬・春休み)には他の島へ旅行したりしてハワイを満喫しました。交通手段は主にバスですが、あまり時間通りに来ることはありません。ハワイの人はのんびりしていて、ゆっくりと時間が流れていました。

留学当初は英語に自信がなく、人と話す時にとっても緊張していました。授業でも先生や学生の言っていることが理解できず、落ち込むことも多くありました。しかし徐々に友人ができ、生活にも慣れ、最後の方には帰国を伸ばしたいと思っただけりいりました。留学は大変なこと多いですが得るものは計り知れません。迷っている人は是非行ってみてください!大きな財産になりますよ。

視察報告

- 6/10 山口県高森高校 44名
- 6/15 安芸南高校 26名
- 7/1 広陵高校PTA 15名
- 7/1 安佐北高校 19名
- 7/3 五日市高校PTA 27名
- 7/8 広陵高校 5名
- 7/9 広島文教女子附属高校 19名
- 7/9 安芸区母親クラブ 17名
- 7/11 安芸府中高校 20名
- 8/7,8 オープンキャンパス 139名



オープンキャンパス
渡辺准教授によるデモ風景

発行日 2008年9月25日
発行 広島市立大学語学センター
〒731-3194
広島市安佐南区大塚東3-4-1
編集 堀本真由美
伊達美和子 (内線: 6410)
Phone (082)830-1509
Fax (082)830-1794
E-mail lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
ホームページ
<http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html>

